

レポート

「アマゾン熱帯雨林植樹の旅」に参加して

社団法人 日本貿易会 企画グループ

かに た あや の
蟹田 綾乃

今年2月末、日本を出発し、飛行機での移動を続けること30時間以上。初めてのブラジルは、アマゾンの奥地“マナウス”という町でした。まさか自分が訪れるとは思っていなかったアマゾンは、思いのほか開発の進んだ、多様で興味深い土地でした。

アマゾンに木を植えに行きます

“アマゾン”と言うと、何が思い浮かびますか？「ジャングル？」、「アマゾン川とピラニア？」おそらくそんな「残された大自然」というイメージが強いのではないのでしょうか。

今回、私がアマゾンを訪れたのには一つの目的がありました。それは、「植樹」。実は、「大自然」のイメージの一方で、アマゾン熱帯雨林の減少が深刻な問題となっています。私が参加した「アマゾン熱帯雨林植樹の旅」は、少しでも熱帯雨林減少の抑制に貢献しようと、日本からのボランティアとして木を植えることを目的として実施されました。

「植樹」を始めるきっかけをいただいたのは、2003年春のことです。当時、当会地球環境委員会が実施する社会貢献活動「大学における環境講座」の中で、三菱商事の「ボルネオ熱帯林再生実験プロジェクト」について、学生に混じり講義を受けたのが、転機となりました。「熱帯林」や「植樹」などには無知だったものの、その後、同社社会・環境室より「ボルネオ熱帯林植樹の旅」のご案内をいただいたことを機に、国内外で植樹に取り組むようになりました。

この「アマゾン熱帯雨林植樹の旅」では、植物生態学の権威であり、横浜国立大学名誉教授、(財)国際生態学センター研究所長 宮脇昭先生のご指導の下で植樹を行います。宮脇先生は、今では「宮脇方式」として呼ばれる「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」に、生涯取り組んでおられ、その数は国内外1,500ヵ所以上に及びます。各地で民間企業や非営利団体そして行政とともに、その土地本来の森を再生し続けておられます。アマゾンでも、宮脇方式による熱帯雨林再生が行われ、10年間で高さ20メートルに及ぶ木に成長し、森は見事に再生をしており、「熱帯雨林の再生は不可能」という通説は見事に覆されています（「宮脇方式」について詳しくは、書籍『いのちを守るドングリの森』（宮脇昭著、集英社）、『魂の森を行け』（一志治夫著、集英社インターナショナル）をご覧ください）。

アマゾンの熱帯雨林は今

アマゾン熱帯雨林についてお話しします。地球上の熱帯雨林のうち約40%がブラジルに位置し、地元の方のためのみならず、生態系維持や二酸化炭素吸収などに極めて重要な役割を果たしています。しかし、この貴重な熱帯雨林も現在は危機的状態にあります。驚くべきことに、1年間で失われてしまう熱帯雨林は、日本の四国の面積、もしくはそれ以上とまで言われています。その原因は実にさまざま、非常に複雑です。

約30年前まで、ブラジルにおいて森を切り開くことは善とされてきました。人口増加に伴い、貧富格差や失業率の問題も増え、土地なき農民が農地を拡大するためにも、森は切り開かれていきました。農地拡大のひとつの手法として「焼畑」が一般的に知られています。しかし、一度焼



植樹した皆さんと（筆者：後列右端）

畑を行うと、短期的には作物が育っても、その後は土の養分が無くなり農地としても利用できず、その土地の森が自然再生するまでには約300～500年かかると言われています。また、木材や大豆など輸出産業も原因のひとつです。熱帯の樹木は木材に非常に適していることもあり、多くの木材が輸出されています。地元の方の話では、横浜にある「大さん橋」に使用されている木材も、私が植樹を行った“ベレン”の町から輸出されていると聞き、日本人として複雑な思いがしました。また、「違法伐採」の問題もあります。政府は森林対策に苦慮しており、木材輸出制限や衛生管理システムの導入など厳しい取締を行っていますが、実際には政治家と違法伐採者の癒着などもあり、一掃させることは容易ではないようです。

しかし、このような背景による熱帯雨林の減少が進む中、少しずつ光明も見えています。アマゾン川河口に位置するパラ州では、「パラ州木材輸出業協会（Aimex）」や民間企業を中心に森林伐採地域における再森林化を行っています。「森と人との共生」をめざし、その活動は徐々に広がりを見せています。そして、私が参加した「植樹祭」もこのAimexと環境保護団体「アマゾン森林友の協会（Asflora）」が主催したものでした。また、三菱商事は1992年から当地で「アマゾン熱帯林再生実験プロジェクト」を実施しています。

地元の子供たちと共に

パラ州ベレンの中心部からバスで移動すること1時間あまり。宮脇方式によって再生された森を視察した後、植樹の地へと向かいました。

バスから降りた私たちを迎えてくれたのは、おそろいのTシャツと麦藁帽子を身にまとった地元小中学生の可愛い笑顔でした。人なつこい子供たちに囲まれ、ガイドの通訳を介して、名前や年齢を聞きあいながら植樹会場へと歩いていきました。

炎天下約40度の中、植樹祭が始まります。小中学生約60名をはじめ、子供たちの保護者、学校関係者、そして日本からのボランティアなど総勢百数十名。多民族国家ブラジルを感じさせる、さまざまな顔の参加者がそろいました。植樹説明の後、地元の木であるアンジェローバやイッパイなど39種類の木を植えていきます。子供達も大人と交じり、土まみれになりながら、一生懸命一本ずつ丁寧に植えています。数千本用意された苗もわずか一時間あまりですべてが植えられました。最後は、子供も大人も嬉しそうな笑顔で、全員が木々を囲んで手をつなぎ、地元ならではのお祈りをして植樹祭は幕を閉じました。



木を植えるとは

植樹をすることのメリットは、非常に多様です。環境保全のため、地元の人のため、そして温暖化対策などはもちろんのこと、人の「心」までに素晴らしい効果があります。木を植えることは新たな「命」を植えることでもあります。自然への興味・関心が生まれるとともに、木の成長が自分自身の成長とも重なり、命の大切さにあらためて気がつく機会にもなります。植樹は人種や言葉、宗教そして年齢や性別の違いをも超えて、共通の貴重な体験となります。

お金を払って地球の裏側まで木を植えに行くという行動を不思議に思う方もおられます。それでも、環境問題を解決に向かわせるには、少しずつでも自分にできることを足元から行うことが大事ではないかと思っています。環境問題はひとつの取り組みだけでは解決しません。だからこそ、政府レベルの大きな枠組みだけでなく、一人一人ができることをしていく必要があることをあらためて学ばされたブラジルへの旅となりました。

いつかもう一度、同じ場所を訪れて、自分の植えた木々が大きく成長した姿を見られることを願っています。